

大学という世界

全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー／
異文化コミュニケーション学部教授
細井 尚子

縁あって、18歳からずっと「大学」という世界にいる。学部生、院生、助手時代までずっと同じ大学にいたため、立教大学に着任して、「これが大学文化」だと思っていたものが実はただの個性だったと分かった。お世話になっていた当時の母校は放任型で、いい悪いも本人次第、大きなプールがそのまま海に繋がっているような、その中で自由勝手に泳ぎ、遊び、溺れたりもする環境だったわけだが、立教は教員・職員とも、もつと学生を見守る姿勢がある。例えば学業。成果が科目設定の目標に全く届かなければ単位は取得できないが、そうなりそうな学生に対して、もつと早めのフォローは出来なかったのかと教員が問われる。例えば課題の提出期限などさまざまなルールを守れない場合、教員はその理由を尋ねてフォローすることを求められる。ルール違反はまずお仕置き（単位が取れないとか、評価が下がるなど）、そこから自分で復活という大学文化で育った者にとってはこの姿勢は衝撃的であり、自分ももっていたものさしの目盛りを1センチ幅から1ミリ幅に修正するのに数年かかったように思う。確かに1ミリ幅でなければ見えてこないものもある。ただ1ミリ幅のものさしは、学生自身もつと主体性や責任をもつ喜びを奪わないよう留意することとセットでなければ使えない。

大学では学士号を取得するために、必修科目ではどのような科目をどれくらい、自由科目はどのような範囲からどれくらいと学部ごとに決められているが、授業自体は個人仕様にはなっていない。そこから何を学び、吸収し、発展させて自分仕様にするかは学生個々の興味・関心に託されており、自分で学びをデザインする喜びがある。高校までのある程度決められ、与えられた栄養をきちんと咀嚼・吸収する勉強とは異なり、自分で知識や心の栄養を探しに行く楽しさ、不消化で苦しむ楽しさも大学ならではのものだろう。しかし、私達が学部生だったのはるか昔も同様だが、大学生になったからといって、放っておいても誰もがそのデザイン力を自己発芽できるわけではない。まずは自分が何に興味・関心があるのかに気付くチャンスに出会える必要があるからだ。

立教では2016年度から「グローバルリーダーを育成する新しい学びのスタイル」として「RIKKYO Learning Style」が始まった。これは学部をベースに展開する専門教育、全学共通科目として展開する総合系科目（「学びの精神」「多彩な学び」「スポーツ実習」と言語系科目、そして体育会やサークル、ボランティアや海外体験などの正課外活動も組み合わせ、自分の大学生生活をデザインするものである。時間的には4年間を3期に分けて積み上げ型を自然と意識し、e-ポートフォリオシステム「立教時間」で自分でタイム・マネジメントもできるようになっている。このような「RIKKYO Learning Style」「立教時間」は、学びと経験の中で多くの「気付く」チャンスを得られる仕組みでもある。潜在

能力があるのに立ち止まっている、あるいは自分の力に自分自身で気付いていない学生に、マップというか、ジグソーパズルの枠の作り方を示し、どう作るか、いつ、何で枠の中を埋めていくなど完成までの過程は自分次第だよと。こういうところが1ミリ目盛りの強さだろう。

更には2016年度に入学した学生は2年次から、専門科目・全学共通科目の自由科目・正課外活動（海外体験）を自分好みで組み合わせ、ルールに沿って選択・履修すれば、卒業時に学士号以外にグローバル教養副専攻修了証も獲得できる。グローバル教養副専攻には「Arts & Science Course」「Language & Culture Course」「Discipline Course（2018年度新設）」の3つのコースがあり、より多くのことを知る中で新たな関心が芽生えたら、途中でコース変更も可能という柔軟さも備えている。個人が積み重ねた努力を大学が認め、修了証という形になるにあたり、承認願望の充足、結果の視覚化、さらには「RIKKYO Learning Style」の成果として、「1粒で2度美味しい」という意味では現代的でもある。もちろんこうした仕組みに乗らずに、個人で学外にもチャンスを求めて飛んでいく学生もおり、新入生の頃からどんどん顔がしまっていく様子を見るのは楽しくもあり、頼もしくもある。

ところで「グローバルリーダー」とはどのような人を指すのだろう。世の中は、通信手段の発達等により、大きく様変わりした。生まれた時からネット環境のあった世代と話すとき、特に空間把握が全く異なることに驚く。地球の裏側の出来事も人々も、町内会のような距離感で把握しているのだ。現象のみならず感覚に至るまで、すでにあらゆる面でグローバル化が進んだ現在、これから社会に出ていく学生たちが目指す（かもしれない）「リーダー」像が集団の先頭に立つて決断し、道を拓き、指導する…といった従来の比較的単一のイメージのままのはずがない。少なくとも発想や感覚、判断基準がモノカルチュラルでは機能せず、しかし根なし草的な「四不象*」であっては本人も周囲も困るだろう。

大学に近年求められる「～の役に立つ」など「有目的」的なあれこれ、出席を厳しく管理し、数字で学業の達成度をはかることへの偏重…誰にでも分かりやすいという点ではいいのだろうが、私が育った大学という世界はこうではなかった。当時のように自分の中で吸収した栄養が発酵する時間をまとめて4年間（あるいはそれ以上）ポンと渡すだけでは、今では不親切らしい。いわば私達は、自分が経験したことがない「大学という世界」を、自分が知らない将来のグローバル化社会で生きていく学生のために作って行くことを求められている。できることは、大きなプールから海へ。1ミリ幅なので、当然「あつちが海」という案内板くらいは出すし、溺れそうになったら手を思いっきり伸ばせば掴めるあたりに浮き輪も漂っている、そんな環境を整えること。私達とは異なる感覚をもつ学生自身がこの環境の中で自分仕様の「大学という世界」を創り、その過程で社会に出た際に環境ごとに多様であろう「グローバルリーダー」が必要とされる資質を、育ててくれたらと思う。

ほそい なおこ

*よく分からないもの。何であるとはつきり認識できないものの例え。